海外臨床薬学研修　報告書

研修期間：令和６年２月 11 日～令和６年２月 24 日
所　　属：名城大学薬学部薬学科
学　　年：５年
学籍番号：190973424
氏　　名：木村天音

１．参加目的

1 年生のときに海外臨床薬学研修報告会に参加し、海外の薬学教育制度や薬剤師の職能についてとても興味を持った。実務実習を終えた今、アメリカと日本の薬局や病院における薬剤師の役割の違いについて比較しながら学べると思ったため本研修に参加した。

２．研修内容

【研修テーマ】アメリカと日本の薬学教育制度や薬剤師の役割の違いについて知る

【研修日程】

月日	研修内容
２月 12 日	アリゾナ大学薬学部の紹介、アメリカの薬学教育についての講義
２月 13 日	RSV についての講義
２月 14 日	HIV についての講義、医薬品情報の課題についての講義、心房細動についての講義、教授の SNS の活用法についての講義
２月 15 日	EBM と診療ガイドラインについての講義 Part-1
２月 19 日	病院見学(Banner-University Medical Center)、頭痛についての講義、レジデント生による甲状腺クリーゼについての症例報告、薬学教育についての講義、レジデント生による感染症についての症例報告
２月 20 日	フェニックスキャンパス訪問 公衆衛生(薬学)についての講義、外来薬局についての講義、病院(内科専門)薬剤師についての講義、外来薬局薬剤師についての講義、調剤薬局についての講義、調剤体験(リップバーム作り)、フェニックスキャンパスツアー フェニックスキャンパス生との会食・親睦会（英会話でのキャンパスライフ・薬剤師のキャリアに関する情報交換および異文化・食文化交流）
２月 21 日	薬局見学(CVS pharmacy) EBM と診療ガイドラインについての講義 Part-2、薬剤師による経営学・経済学についての講義、服薬アドヒアランスについての講義
２月 22 日	高齢者における服薬の安全性についての講義、薬剤師の役割についての講義、がん専門薬剤師についての講義、てんかんについての講義、フォーミュラリーについての講義、アメリカでの薬物治療管理についての講義

【研修内容の詳細】

アメリカは薬学部入学のために 2 年間の pre-pharmacy のプログラムを修了する必要がある。その後、薬学部に入学し 4 年間の専門教育を受ける。卒業後は Pharm.D.の称号が得られ、薬剤師試験(全米共通)と薬事法規試験(各州で異なる)の両方に合格すると薬剤師として働くことができる。

HIV の講義では、HIV 専門クリニック(薬剤師外来)がアメリカにはあり、そこで薬剤師が pill box で薬を管理したり、各患者にあった治療法に変更したりすることで患者のアドヒアランスの改善を行うことを学んだ。アメリカでは国民全員が民間医療保険に加入していないことから、受けられる医療サービスが限定されたり、個人が負担する医療費が高額になったりすることがある。医師の数や医療資源が不足していることからも、患者は薬剤師外来で薬物治療を受けることが主流であることを学んだ。

病院見学では、病棟や薬剤部を中心に薬剤部スタッフの役割について現場で解説していただいた。ピッキングや TPN 調製および抗がん剤調製はテクニシャンが行い、薬剤師は主に患者情報や検査値などの臨床情報をもとに適切な薬物治療が実施されているかどうか確認する監査業務を行っていた。本病院では外傷に関して注力しており、米国外科医協会からレベル I 外傷センターとして認証されている。救急搬送の連絡が入った時点から、多職種による情報共有と治療介入のためのプランニングが行われており、外傷や出血性ショックなどに迅速な処置を提供するための処置室が数多く設けられていた。

薬局見学では、薬剤師による処方鑑査後、テクニシャンが薬を取り揃えることを薬剤師から教えていただいた。取り揃えた薬を機械に通すことにより数をカウントし、薬の画像を撮影して印字をクラウドデータベースと照合することで、薬剤名と個数などの正誤の判断と破損および異物混入などの確認を行った後にボトルに薬を詰めていた。薬剤師による調剤薬監査を受けてから、テクニシャンが患者に投薬を行っていた。アメリカでは薬剤師によるワクチン接種が認められているため、ワクチンが接種できるスペースが設けられていた。メラトニンや胃酸分泌抑制薬などの一般用医薬品は手に届く場所に陳列されており、日本よりもスイッチ OTC 化が進んでいると感じた。

３．感想

アリゾナ大学海外臨床薬学研修に参加し、アメリカと日本の薬学教育制度と薬剤師の職能の違いについて理解することができた。アメリカの薬学部では臨床実習が 1 年次からカリキュラムに組み込まれていた。低学年から医療現場に携われることは薬学実践能力を早期かつ段階的・持続的に身につけることができるため、とても有益なプログラムだと感じた。日本でも早期体験学習の機会が今後さらに増え、持続的・継続的な実地研修ができるようになると、5 年次での実務実習や薬剤師として医療現場で活動する際にそのプログラムで得られた知識や能力が役立つと思った。

講義を受講していて 1 番心に残っていることは、Katz 先生が「個々の患者にあった治療を行いなさい」とおっしゃっていたことだ。ガイドラインを参照して治療薬を提案することも大事ではあるが、ガイドラインがすべての患者に適応されるとは限らないため、その言葉はとても心に響いた。目の前の患者のことを 1 番に考え、聴き取った情報から患者に最も適した治療薬を提案できる薬剤師になれるように今後も研鑽を積みたいと強く思った。

最後に、アリゾナ大学海外臨床薬学研修に携わったすべての関係者の皆様に深く感謝申し上げます。